

卒業生・修了生による教育評価の調査研究

友定保博・佐々木司・吉田一成・福田 廣・杉山 緑・星出一巳
(自己点検・自己評価ワーキング・グループ)

Graduate investigation research on evaluation of faculty education
and graduate school education

Yasuhiro TOMOSADA, Tsukasa SASAKI, Issei YOSHIDA,
Hiroshi FUKUDA, Ryoku SUGIYAMA, Kazumi HOSHIDE
(Self-check and a self-valuation workgroup)

(Received September 27, 2002)

I はじめに

平成3年大学設置基準の改正により、各大学に自己点検・評価システムの導入が制度化された。これを受けて本学でも自己点検・自己評価委員会が設置された。

大学の教育研究活動の評価方法には教職員や学生による内部評価、学外の有識者による外部評価等があり、本学でも共通教育センターによる「学生による授業評価」の実施や専門教育科目に対する同様の授業評価が一部の学部で既に実施されており、教育学部も1999年から受講学生を対象にした「授業評価アンケート調査」を制度化させ、その調査結果を授業改善に反映させてきている。

しかしながら、これまで卒業生・修了生の評価については、それらを実施し、授業等の改善に結実させることは行ってこなかった。卒業生・修了生は、在学中の経験はもとより、その後の社会的な生活、職業経験などに照らして出身校の教育活動を評価できる貴重な存在である。

山口大学教育学部は山口師範学校と山口青年師範学校を母体として、昭和24(1949)年、新制大学の発足と同時に開設された。平成3(1991)年には教育学研究科を開設して教育・研究活動を行っている。この間、教育学部卒業生は12,412名、また教育学研究科修了生は350名を数える(平成14年3月末日現在)。

「ミニ総合大学」とも呼ばれる教育学部では、教育、自然、社会、人文、芸術、健康、情報など多領域に渡る分野の専門教員が、学生の多様な知的欲求に対応し、支援している。その意味では教育学部ほど学生の多様なニーズに対応しうる教員集団を擁している学部は他に類を見ない。

学生の要求に迅速・確実に対応し、きめ細かい学習・生活支援を行うことを目指して21のコース・選修（教室）と教育実践総合センターを設け、学生の教育支援を行ってきた。

この度我々は、こうした卒業生・修了生に忌憚のない意見を求め、それに対して謙虚に耳を傾け、教育機関として、また一人ひとりの教育者として、改善すべきところは改善し、維持すべきところは維持しながら、さらなる向上をはかっていかねばならないと考えた。

このような自覚のもと、山口大学教育学部は自己点検・自己評価委員会を母体にワーキング・グループを組織し、卒業生・修了生を対象にした教育評価調査を実施した。

本稿は、その調査結果に基づき、主として授業の有効度、生活充実度、学部・研究科満足度を分析し、考察を加えるものである。

II 調査方法

1 調査対象者

教育学部卒業生の調査は、過去15年間の卒業生を在学時に所属した教室を単位として、その教室所属教官に任意で調査対象者の抽出を依頼した。回収データ数は341（男性148、女性192、不明1）であった。大学院修了生による評価については、山口大学大学院教育学研究科修了生の中から、平成9年～平成13年の修了生全員を対象とした。回答は98（男性51、女性47）であった。

2 調査内容

A3用紙（縦長横書き仕様）一枚に以下の事項が記述されたものであり、具体的な質問項目は附表の通りであった。学部卒業生、大学院修了生に対する質問項目は、自由記述を除き多肢選択回答形式によった。

(1) 学部卒業生に対する調査項目の構成

- ◇フェイスシート（個人属性）：性別、居住地、卒業年、職業、臨採教員年数、所属教室の6項目
- ◇設問A：授業科目の有意義度に関する8項目
- ◇設問B：授業の人生への貢献、影響度に関する5項目
- ◇設問C：所属教室教官や学生との交流に関する4項目
- ◇設問D：授業充実の方向性に関する3項目
- ◇設問E：成績評価に関する1項目
- ◇設問F：教育学部の目標・期待に関する3項目
- ◇自由記述：教育学部への意見・要望

(2) 大学院修了生に対する調査項目の構成

- ◇フェイスシート（個人属性）：性別、居住地、修了年、職業、臨採経験年数、所属専修の6項目

- ◇設問A：授業科目の有意義度に関する5項目
- ◇設問B：授業の人生への貢献、影響度に関する5項目
- ◇設問C：成績評価に関する2項目
- ◇設問D：修士論文に関する3項目
- ◇設問E：所属専修の教官・院生・学部生との交流に関する4項目
- ◇設問F：授業充実の方向性に関する2項目
- ◇設問G：大学院の目標・期待に関する2項目
- ◇自由記述：大学院への意見・要望

3. 手続き

上述の2種の調査用紙を別個に、教育学部学部長（研究科長）・教育学部自己点検評価委員長の連名による調査協力依頼文書、回答用マークシート、返信用封筒(料金後納)を一式として郵送配布した。

4 調査期間

平成14年3月27日～4月8日（学部卒業生対象調査）

平成14年4月19日～4月30日（大学院修了生対象調査）

III 調査結果

本調査の結果は、本学部・研究科在籍中の教育と生活についてどのように評価しているかをみるため、加野（1997）らの類型を参考に、1）授業が資質・能力にどのような貢献をしたのか（授業有効度）、2）学生・院生としての生活は充実していたか（生活充実度）、3）学部・研究科での目標を達成したか（学部・研究科満足度）、の3点について分析・集計した。

1 本学部卒業生による授業ならびに学部教育の評価

集計に用いた現在の職業別の有効数は336件で、その内訳は下記の通りであった。

小学校教員（本採）85（25.3%） 中学・高校教員（本採）97（28.9%）

小学校教員（臨採）8（2.4%） 中学・高校教員（臨採）15（4.5%）

民間企業 39（11.6%） 公務員（教員以外）21（6.3%） その他 71（21.1%）

また、所属教室別の集計は有効数339件で、その内訳は下記の通りであった。

国語 9（2.7%） 社会 26（7.7%） 数学 24（7.1%） 理科 22（6.5%） 音楽 12

（3.5%） 美術 12（3.5%） 保体 17（5.0%） スポ健 10（2.9%） 技術 18（5.3

%） 情報 8（2.4%） 家政 33（9.7%） 英語 30（8.8%） 国際理解 5（1.5%）

総合文化（国際文化を含む）28（8.3%） 障害児 10（2.9%） 幼児 16（4.7%）

教育 20（5.9%） 心理 39（11.5%）

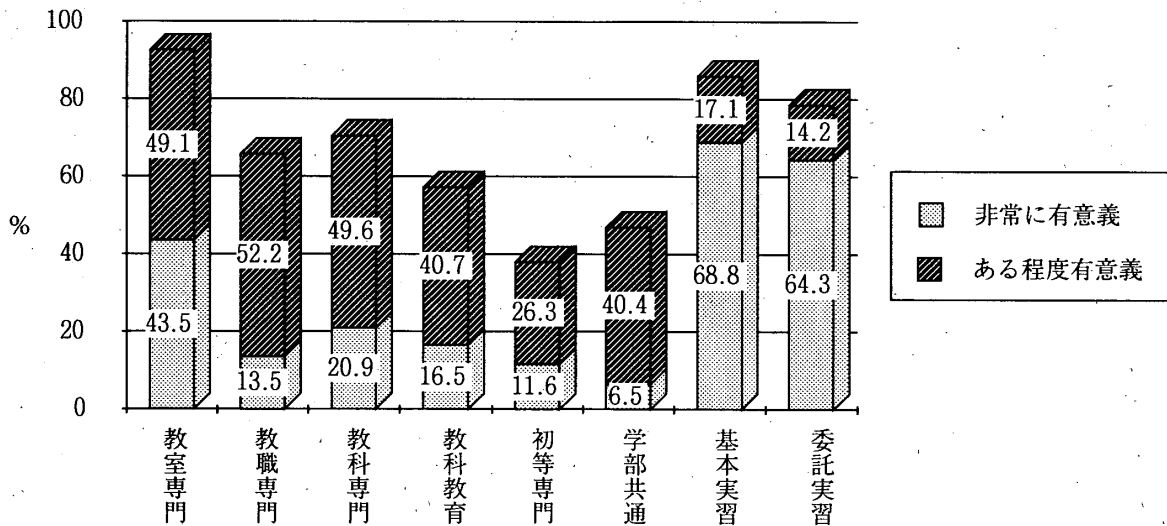
(1) 授業有効度

1) 授業科目の有意義度

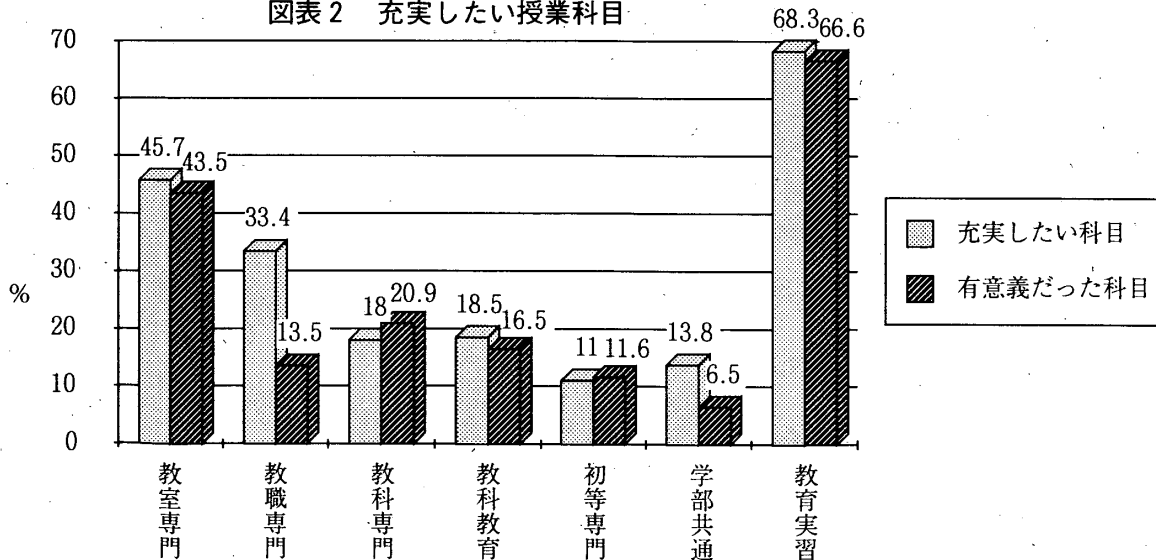
学部開設の授業科目を8群に分類し、それらが卒業後の生活（職業・進路など）に有意義であったかどうかを尋ねたところ、「非常に有意義であった」との評価が多かった科目群は、「基本実習（68.8%）」、「委託実習（64.3%）」および「所属教室の専門科目（43.5%）」などであった。教員養成課程に所属していた者にとっては教科専門科目と教室専門科目の区別が困難な設問といえるが、「教員免許取得」に必要な授業科目（初等専門、教職専門科目など）の評価は相対的に低かった。（図表1）

この結果を「今後、充実してほしい授業科目」と比較したところ（図表2）、「教育実習」が68.2%で最も多く、次いで所属教室の専門科目が挙げられていた。これを「非常に有意義であった授業科目」と比べると（教育実習は基本実習と委託実習の平均値）、ほぼ同様の傾向が認めら

図表1 有意義だった授業科目



図表2 充実したい授業科目



れた。また、卒業後の職業や社会的体験の影響からか、教職専門科目と学部共通科目が「充実してほしい授業科目」となっている。

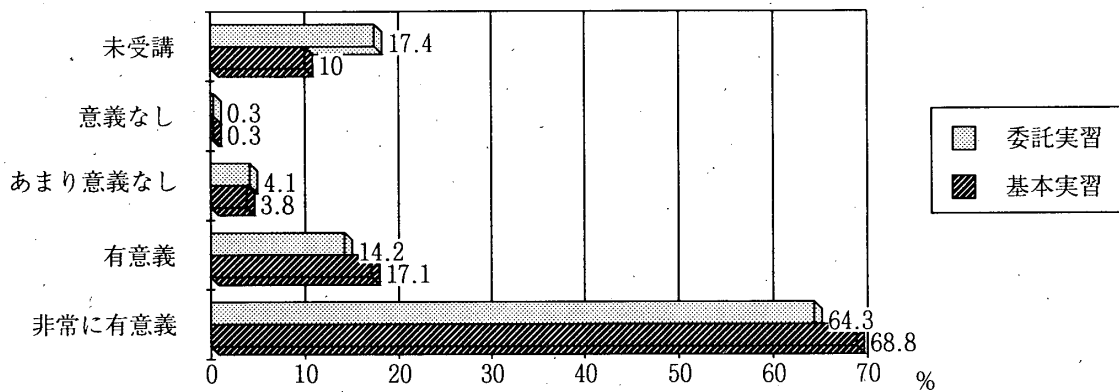
また授業形式の充実については、講義形式（2.1%）よりも、実習・実技形式（61.6%）、演習形式（33.1%）の増設が望まれていた。なお教官の下した「成績」については、89.1%が「予想通り」と回答しており、成績評価の妥当性に疑問や不満を感じている者は少なかった。

2) 教育実習に関する評価

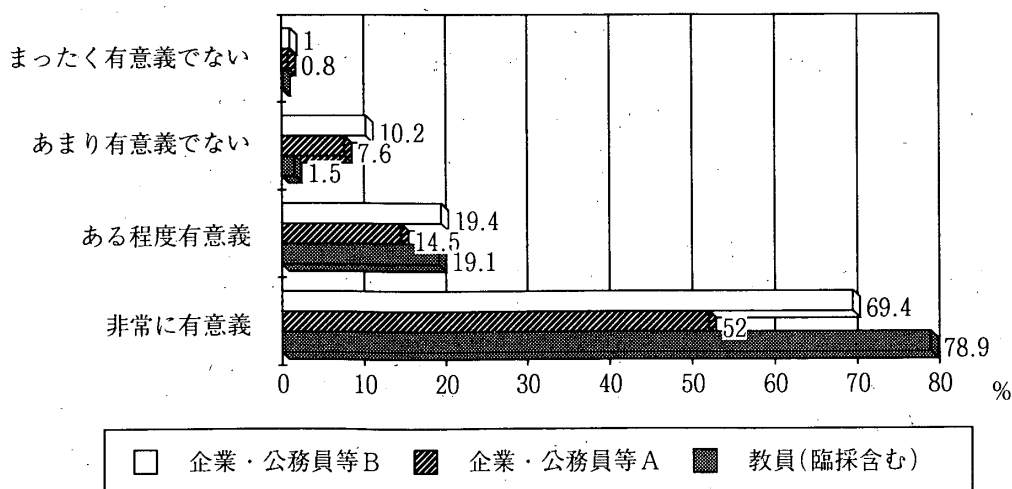
教育実習については基本実習も委託実習もほぼ同様に「有意義」と評価されていた（図表3）。

さらに基本実習の評価を、現在の職業が「教員（臨時採用を含む）」204名と、「企業・公務員など教員以外の者」131名とで比較したところ、「教員」では「非常に有意義（78.9%）」であった者が多かった。教育実習を受講しなかった33名を含む企業・公務員等Aでは52%であるが、それを除いた企業・公務員等Bでは69.4%と教育実習体験を肯定的に評価している。（図表4）

図表3 教育実習の意義

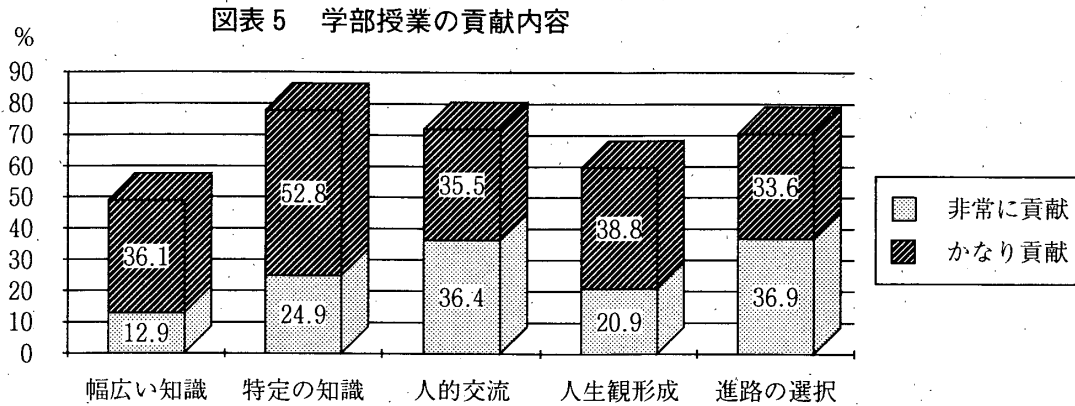


図表4 現在の職業別に見た教育実習の意義

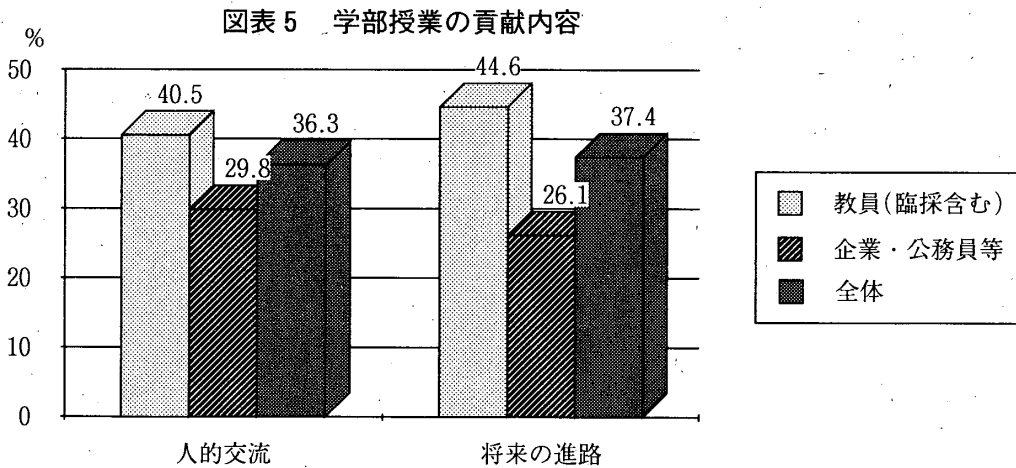


3) 現在の生活に対する学部授業の貢献

回答者の現在の生活にとって教育学部の授業がどのように貢献しているかについて尋ねた結果、「教官や学生との交流 (36.4%)」「卒業後の進路選択 (36.9%)」などの項目において「非常に思う」と回答した者の割合が高かった。(図表5)



しかしながら、現在の職業が「臨時採用を含む教員」と「企業・公務員など教員以外の者」とで比較してみると、「人的交流」と「将来の進路」のいずれも「教職に就いている者」の方が「非常に貢献した」と回答した者の割合が高かった。(図表6)

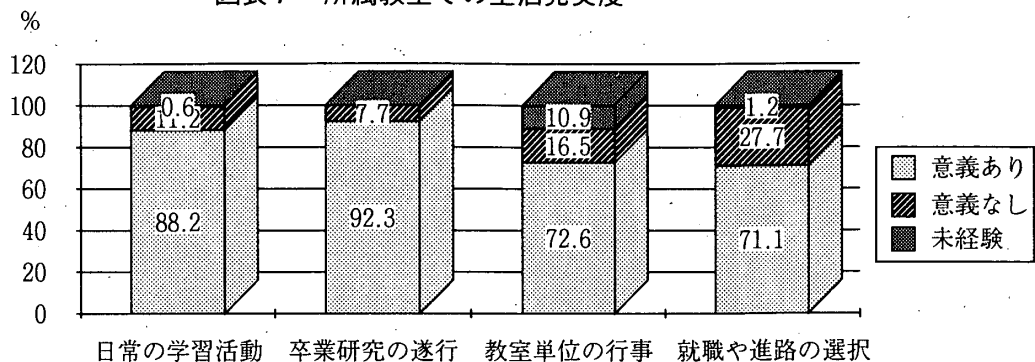


(2) 生活充実度

1) 所属教室での生活充実度

本学部では学生指導の充実をはかるため、所属課程のコース・選修ごとの教員組織(教室)を設置している。そうした教育組織の有効性を日常の学習活動、卒業研究の遂行、教室単位の行事などの側面から検討したところ、いずれも70%以上の者が「生活は充実していた」と評価していた。

図表7 所属教室での生活充実度



2) 所属教室別にみた教室活動の充実度

「教室単位の行事・活動」に関しては全回答者の72.6%が「意義があった」と回答したが、教室によってかなりのバラツキがみられた（図表8）。この背景には教室行事や活動の多寡や組織力、あるいは教室所属教員の協力・指導の不十分さが反映しているものと考えられた。日常の学習活動、卒業研究の遂行に関する設問においても、同様に否定的な評価を受けた教室があった。

(3) 学部満足度

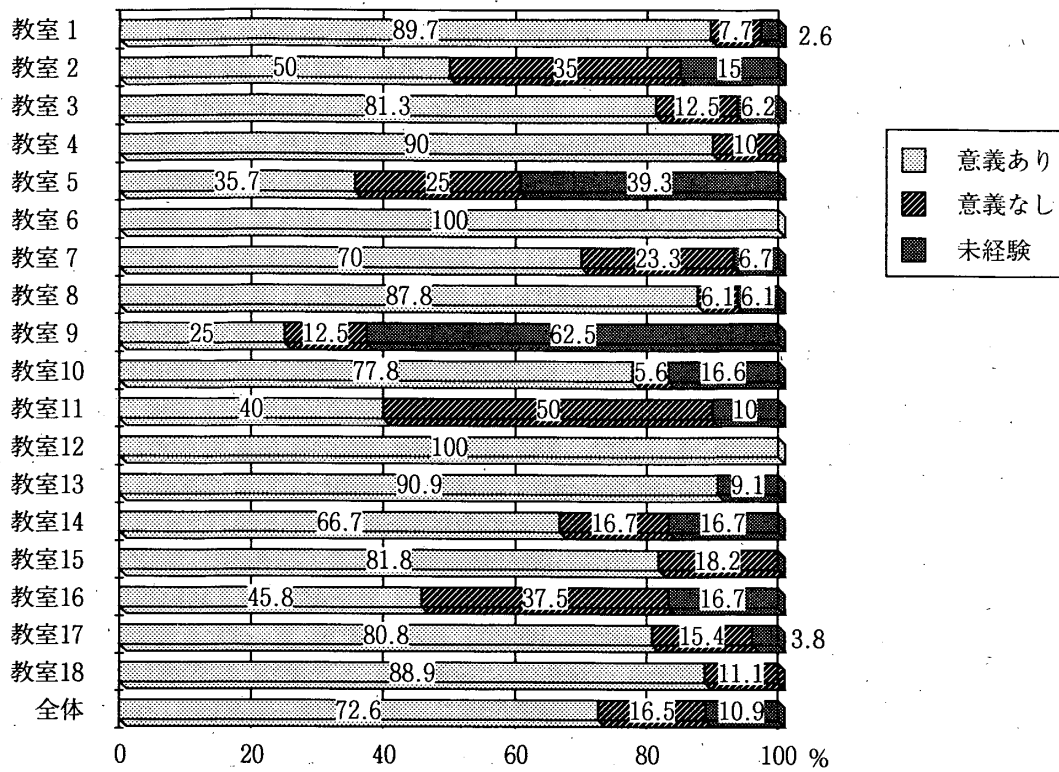
「専門的な知識・技能を培い、豊かな人間性を育む」という学部目標が達成されたと思うか否かを尋ねたところ、全体では「達成（7.9%）」「ある程度達成（56.2%）」を合わせて64.1%、「あまり達成されていない」「達成されていない」と答えた者が33.2%、「分からない」が2.6%であった。

今日のようなアドミッションポリシーや教育目標を周知させる取組みは、本学部では従来、明確に意図した形では行われてこなかったという経緯があり、本調査の回答者が在学時にこうした学部目標を自覚していたとは考えられない。その意味で、この設問に対する回答は、授業評価や学生生活などの様々な要素を含み込んだ学部教育への「一般的満足度」を表しているものと考えられる。全体の7割弱が「ある程度は達成」と回答した結果をどうとらえ得るかについては議論の分かれるところであろう。しかし、これを所属教室別にみると、かなりのバラツキがあり、全18教室のうちの4教室については、「達成された」と回答した者が50%を下回るという事実が示されたことは重く受け止めねばならない。（図表9）

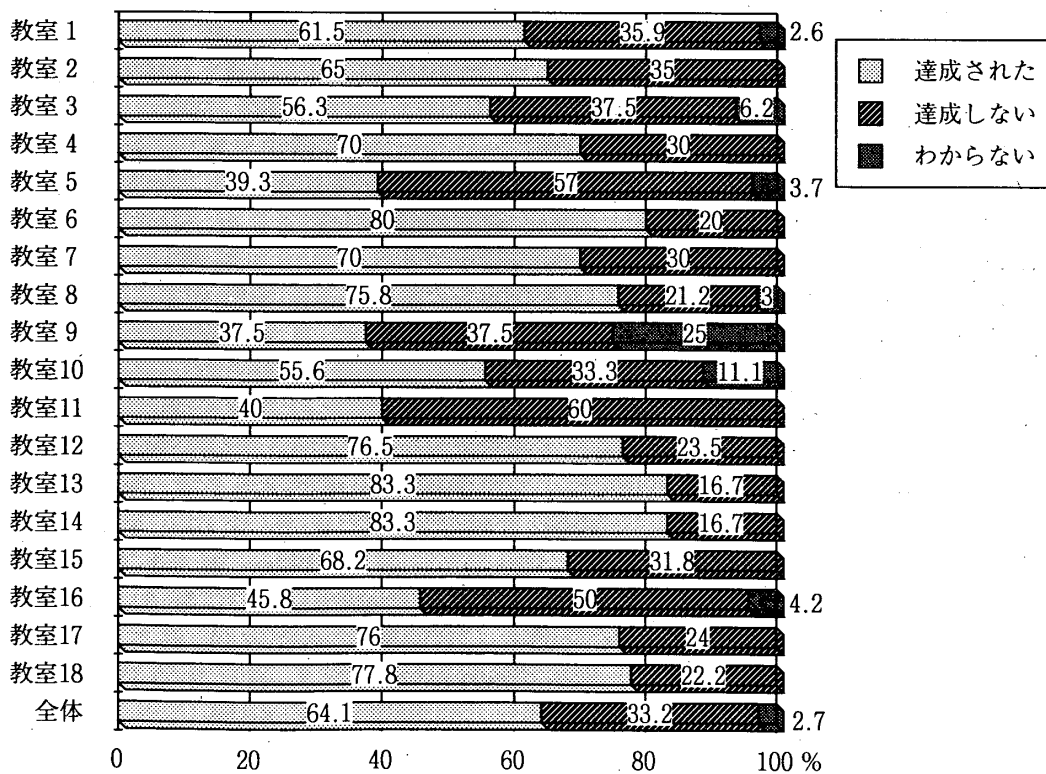
(4) 学部教育に関する卒業生の要望・意見

教育学部に対する要望・意見を自由記述形式で求めたところ184名から回答が寄せられた（53%）。これらの意見を授業改善を主とした学部教育の改善方策という視点からKJ法で分類・整理した結果が図表10である。

図表8 所属教室の生活満足度

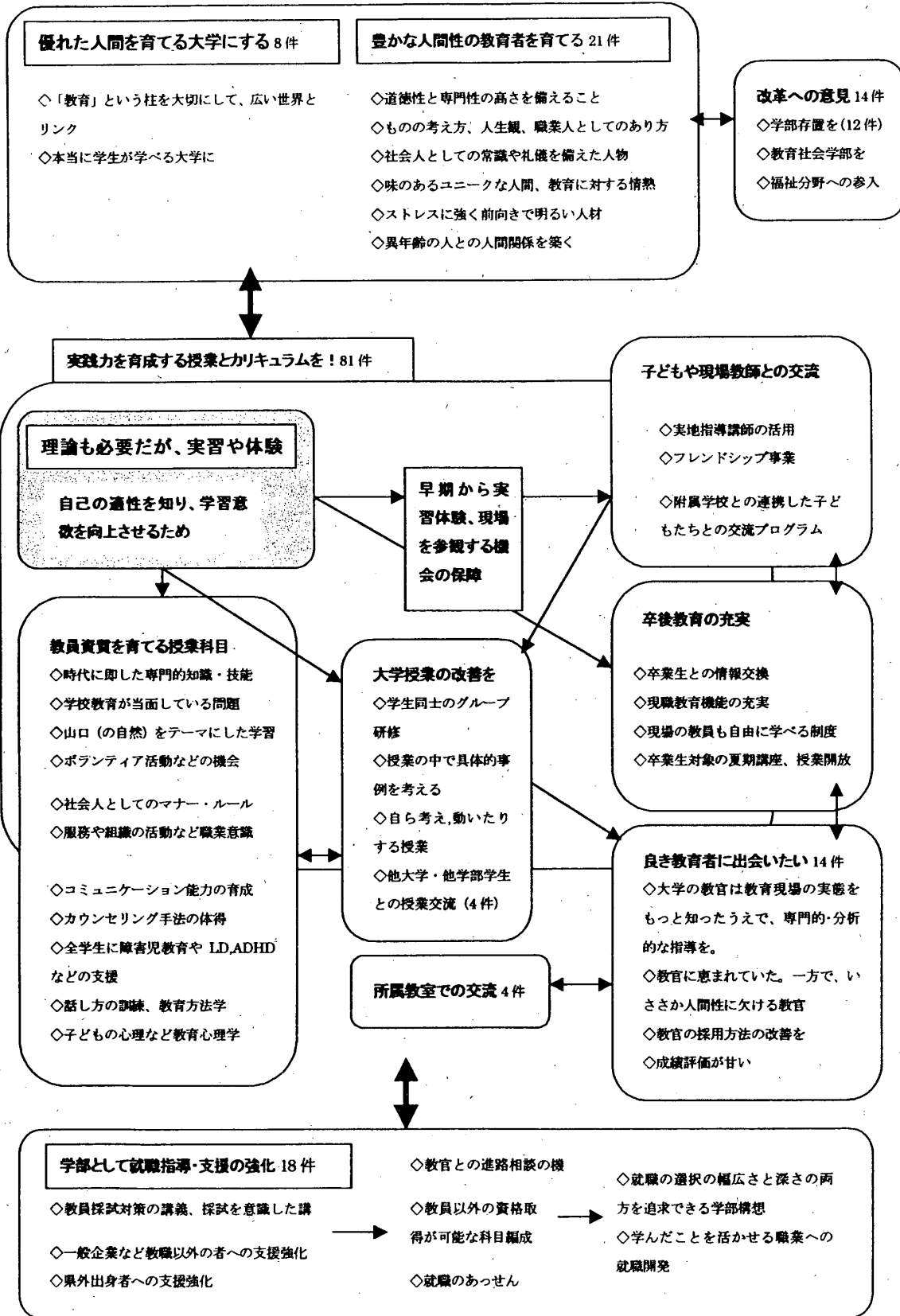


図表9 学部目標の達成度



※図表8・9の教室番号は調査用紙と異なる。

図表10 授業改善を主とした卒業生の要望・意見



「目標・理念」のレベルでは、「豊かな人間性をもった、すぐれた人間を育てる学部」としての機能が強く期待されていた。また、「授業・カリキュラム」のレベルでは、「実践力の育成」が強く期待されていると考えられた。これに関連して、「理論も必要だが、実習や体験を早期から導入すること」を提案した意見が多かったのも特徴的であった。「教養教育」や「専門的知識」が重要であることについては、「学部在学中からこれらを自覚し、修得に取り組むことは難しい」との意見も少なくなかった。入学早期からの「実習や体験」が理論の必要性に気づかせ、学習意欲をもたらす重要かつ有効な要因であることを指摘する意見が数多くみられたことは、本学部の今後の教育システム改善に対する重要な示唆といえよう。また、そのためには、「子どもや現場教師との交流のための活動やプログラムを充実させる」こと、あるいは「卒業生との情報交換や講座開設」などの、卒後教育を含めた実践的な教育の強化・充実を提案する意見が多かった。

「実践力を育成する」という趣旨から、大学の授業方法も具体的事例をもとに学生自身が「自ら考え」「自ら動く」ような授業へ変えること、さらには他大学・他学部学生との授業交流や学生同士のグループ研修を充実させる方向を志向すべきとの指摘も4件あった。

本調査に回答を寄せた卒業生のなかには、教育現場や社会生活の体験に基づき、教員資質や人間性を育てるために必要な授業科目を具体的に挙げた者がいた。また、学部教官に対する意見も14件あり、それらはいずれも教育現場の実態に沿った授業や、人間性を豊かにするための反省や工夫を求めるものであった。教育に携わる人材の養成を主たる目的とする本学部の教官にこそ、「良き教育者」になってほしいと希望する意見は傾聴すべきといえよう。

2 大学院修了生による研究科教育の評価

全体数は98であるが、修了年別の集計は94件であり、内訳は下記のとおりである。

平成9年 19 (20.2%) 平成10年 17 (18.1%) 平成11年 19 (20.2%)
平成12年 18 (19.1%) 平成13年 21 (22.3%)

また、所属専修別の回答数は97件で、内訳は以下のとおりであった。

学校教育専修 25 (25.5%) 国語教育専修 3 (3.1%) 社会教育専修 4 (4.1%)
数学教育専修 4 (4.1%) 理科教育専修 10 (10.2%) 音楽教育専修 5 (5.1%)
美術教育専修 10 (10.2%) 保健体育専修 7 (7.1%) 技術教育専修 11 (11.2%)
家庭教育専修 5 (5.1%) 英語教育専修 13 (13.3%)

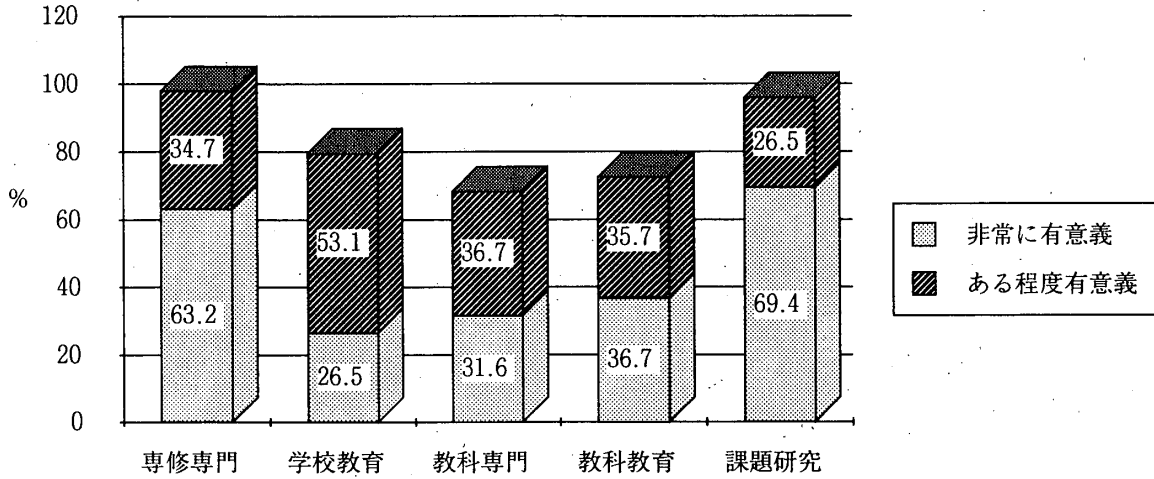
(1) 授業有効度

1) 有意義だった授業科目

大学院の授業科目を、自分の専修分野に直結した専門領域の科目（専修専門）、教育学や心理学など学校教育に関する科目、国語学、社会科学、数学、物理学、体育学、器楽、絵画など教科専門の科目、〇〇科教育特論などの教科教育の科目、課題研究に分け、それらが現在の職業など

に及ぼしている意義の軽重について4件法で尋ねた。その結果、課題研究、専修専門科目については90%を超える者が「有意義であった」と回答した。その他の科目についても、学部卒業生の評価結果よりは全般的に高かった。(図表11)

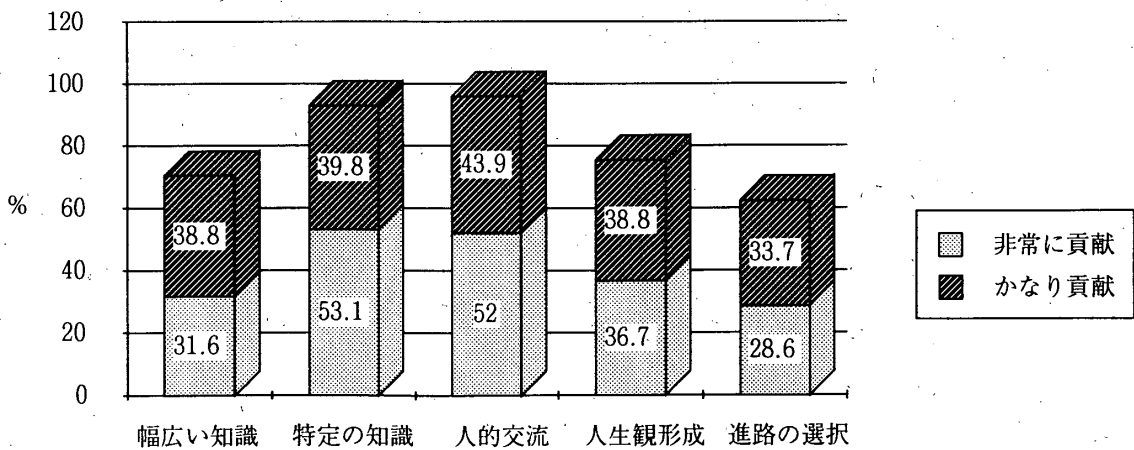
図表11 有意義だった大学院授業科目



2) 大学院授業の貢献内容

大学院修了者が「非常に貢献した」と評価した項目は「特定分野の知識・技能を身につける」が53.1%、「教官や学生と人的交流」が52%と半数を超えていた(図表12)。この結果は学部卒業生とほぼ同じ傾向であった。

図表12 大学院授業の貢献内容



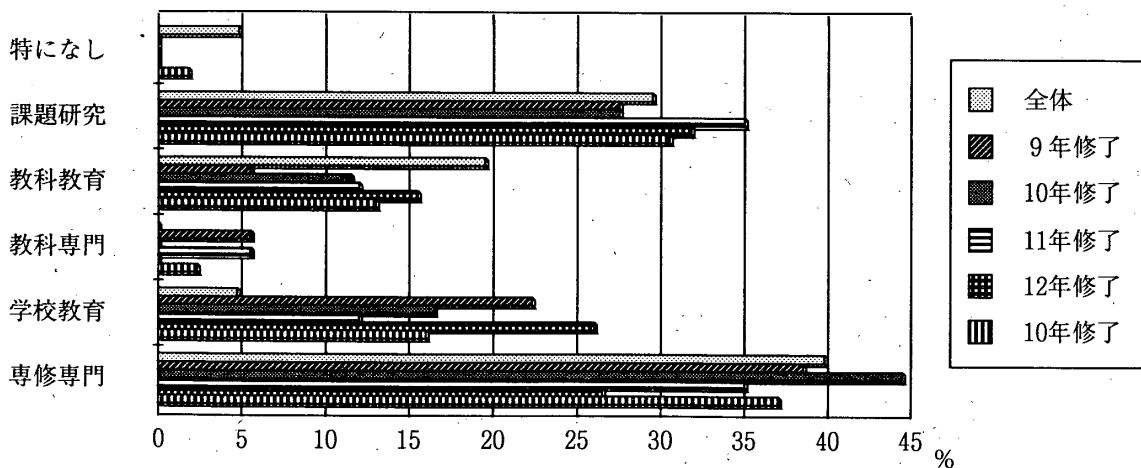
3) 充実させたい科目や授業形式

今後充実させたいものを5つの科目群から1つ選択させたところ、「専修専門科目37.5%」、「課題研究30.2%」が相対的に多く選ばれ、「学校教育科目16.7%」、「教科教育科目12.5%」、「教科専門科目2.1%」であった。図表11でみたように学校教育、教科教育、そして教科専門科目について「非常に有意義」としたものは3割程度であり、「今後充実させたい科目」として挙げる意見が少なかったことと併せると、注意を要する。なぜなら、これらはいずれも教員養成系の教育学研究科としてのアイデンティティーに関わる中核的科目だからである。(図表13)

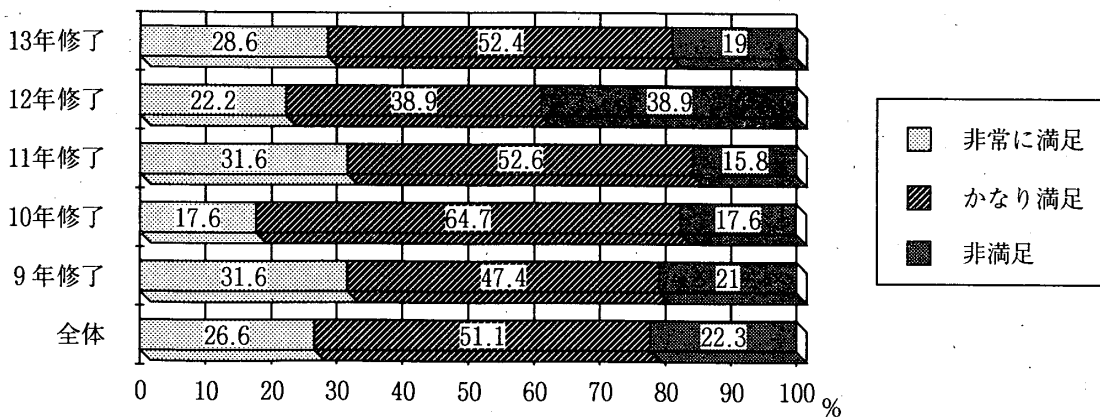
授業形式の充実については、「演習形式」を挙げた者が51.5%、「実習・実技形式」を挙げた者が39.2%であった。これは「講義形式」を挙げた5.2%の低さと極めて対照的であった。さらに言えば、学部卒業生と比べて、「演習形式」の充実を望む者の比率が高かったことは考慮すべき課題といえよう。

授業の成績評価については、96.9%は「予想通りであった」と回答した。しかしながら、41.8

図表13 充実させたい授業科目



図表14 修士論文の満足度



%が成績評価の方法や判定基準について「あらかじめ提示がなかった」と回答した。

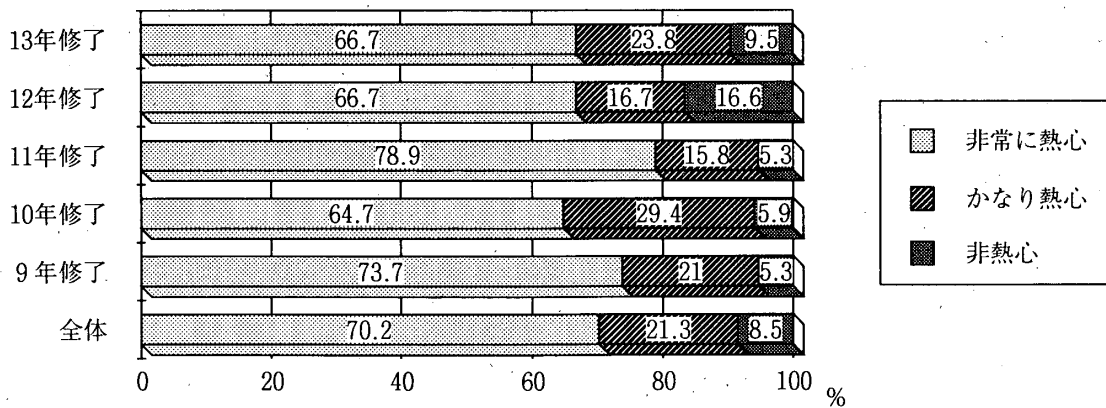
4) 修士論文の満足度

修了生の多くが有意義であったと回答した「課題研究」についてその満足度をみると、自らの修士論文の出来映えに満足している者は76.7%であった。しかし「非常に満足」とした者は3割弱であり、「満足していない」とした者も平均で2割、年度によっては4割弱であったことなどは、課題研究指導のあり方についての検討を求める結果といえる。(図表14)

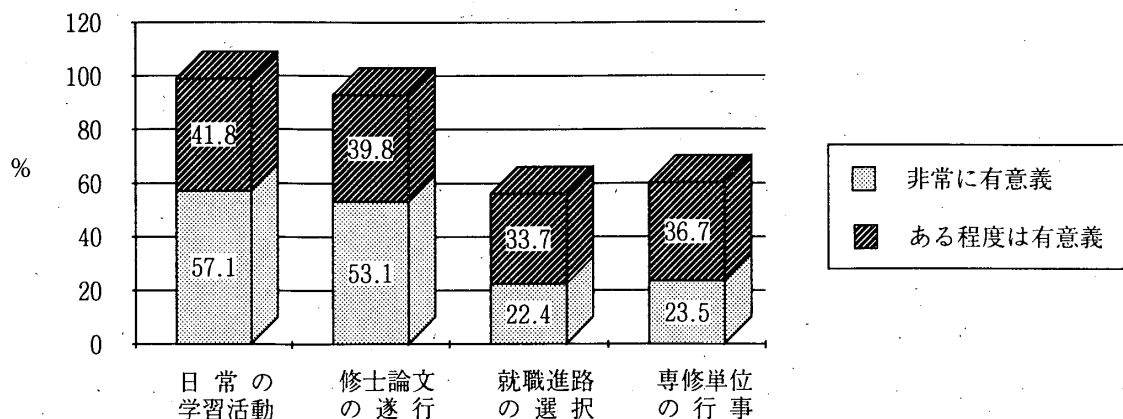
修士論文の指導にあたる教官の熱意について尋ねたところ、「非常に熱心」が70.2%、「かなり熱心」が21.3%、そして「熱心でなかった」とされた教官が8.5%であった。修了年度により多少の違いはあるが、回答者の多くが「概ね熱心な指導を受けた」と評価しているといえる。他方、各修了年度とも「熱心でなかった」と評価された教官が存在することも事実としてある。(図表15)

研究という側面では、大学院で学んだ成果を(在学中を含めて)学会等へ論文投稿した者が38.8%、学会で発表した者が49%、研究会等で発表した者は37.7%であり、まったく発表したことが無い者は23.5%であった。

図表15 指導教官の熱心さ



図表16 所属専修での生活充実度



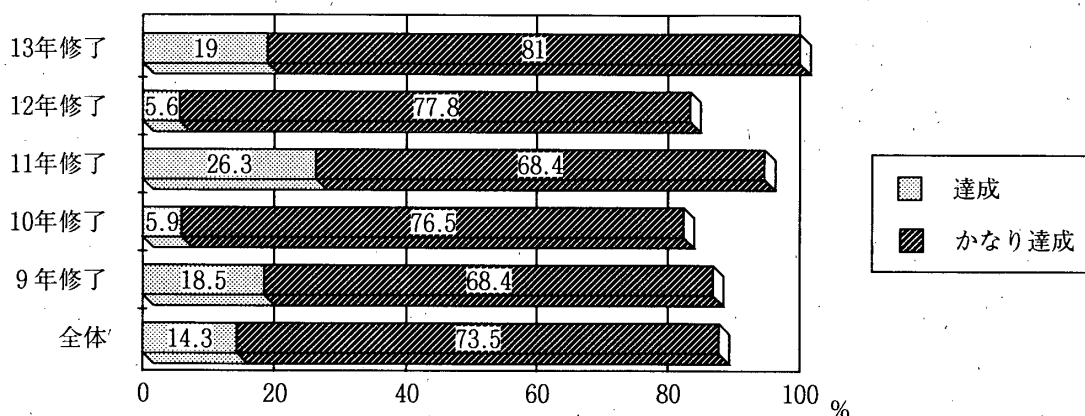
(2) 生活充実度

所属専修での「日常の学習活動」や「修士論文の遂行」については、「非常に有意義」とした者が50%を超えていた。一方、「就職・進路の選択」と「専修単位の行事」に関する満足度は相対的に低かった。これらの結果の背景には本学部・研究科の就職支援機能の弱さや教員としての就職の厳しさ、あるいは学部に比べて研究科（専修）独自の行事や活動が少ないことなどが関係しているものと考えられた。（図表16）

(3) 研究科の満足度

大学院の教育目標の達成度について尋ねた結果、いずれの修了年度においても「かなり達成された」を含むと80%を超える肯定的回答が得られた。しかしながら「達成された」とした者が10%を下回る年度もあり、全体としてみれば本研究科教育に十分な満足が示されてきたとはいえない。（図表17）

図表17 大学院の目標達成度



IV 考察

1 「職業への有用性」と実習・体験重視の関連

大学卒業生による教育評価に関する先行研究はこれまでさほど多く実施されていないように見える。例えば、日本語論文検索データベースであるMagazine PLUSで、「大学」「卒業生」「評価」の3語をキーワードに検索してヒットしたのは19件であった（2002年9月現在）。

周知のようにこの10年間、各大学は大学設置基準に規定された自己点検・自己評価を積極的に実施してきた。しかし、上述の検索結果は卒業生による大学評価はさほど行われてはこなかったことを示すものであろう。また仮に行われた場合でも、結果は各大学作成の内部報告書に留まり、他大学と共有されるかたちで開示されなかったものと考えられる。

このような状況にはあるものの、これらの先行研究の中には我が教育学部・教育学研究科にとって興味深い指摘もみられる。その第1点は、大学は職業や実践との関係のなかで評価されることが多く、職業に対する有用性が高い場合には肯定的に評価されるということである。

この指摘は、全国の大学卒業生約1万4千人を対象にした山内（1995）、ならびにその調査結果をベースに卒業生からみた大学像を描いた小方（1996）の報告である。そこでは「職場で求められる知識・技能と大学で教えられる知識・技能との間にはギャップがあり、両者に接点がない場合には大学は低く評価されてしまう」、また、「職業生活に最も寄与した」と卒業生が感じているのは大学時代の「体育会・サークル、友人関係」であって、それは「大学の授業」をはるかに上まわるとの指摘である。同様の調査結果は、国際基督教大学に対する評価について論じたトロイヤーら（1976）によっても明らかにされている。それによれば、「大学の教育プログラムが職業に直接的に関係していたと考える者は、プログラムの有用度や重要度に高い評価を与えている」という。

一般に「職業への有用性」は、教員養成を目的とする教育学部の場合には、「教育実習」に高い評価が示されるというかたちで現れる。信州大学教育学部卒業生を対象にした守（1998）の調査でも、「よい印象の授業」、「役立つ授業」として最も高く評価されているのは教育実習であり、他の授業を完全に凌駕するものであることが示されている。

この傾向は、今回の本学部卒業生に対する調査においても同様の結果が得られ、多くの者が、基本・委託を問わず、教育実習を「非常に有意義」であったと回答している。また、現在の職業が教員でない卒業生においても、ほぼ7割が教育実習体験を肯定的に評価している。今後充実の望まれる授業形態として実習・実技形式が圧倒的に支持されていることや、卒業生の要望・意見（図表10）として、「理論も必要だが、実習や体験の重視」が強調されていたことを考え合わせると、職業体験的な実習のさらなる導入・充実が必要であることを示した結果といえる。

また、今回の調査では、実習や体験は「職業への有用性」を求めるという側面だけでなく、「自己の適性を知ることができ」、「学習意欲を向上させることができる」、という多くの卒業生の指摘は今後の本学部の教育方法改善に関して特に重要である。

2 大学の選抜性と理論的教育・応用的教育の関連

第2点は、小方（1996）による次のような指摘である。卒業生には理論的教育を期待する層と応用的教育を期待する層が存在し、前者は国立大学出身者や理工系に多く、後者は私立大学出身者、人文社会系に多いという。また、卒業後に職務経験を積んだ者の多くには、応用的教育が志向されることに変わりはないものの、理論的教育、論理的・体系的な考え方を求める傾向がみられる。しかし、理論的教育か応用的教育かの選択は、これら以上に、入学の難易度、つまり大学の選抜性に関係している。選抜性が高い大学の卒業生は理論的教育志向が、選抜性の低い卒業生は応用的教育志向が強いという指摘である。

選抜性による差異に関しては、我々の調査の範囲を超えるものでもあり、本稿でそれに言及することはできない。また、職務経験を積んだ者が理論的教育、論理的・体系的な考え方を求める傾向がみられるかどうかについても、今後の調査課題である。

とはいえ、教育学部の授業は、就職や職業技能の獲得に役立つようなものに完全にシフトさせていけば高い支持を得られるのであろうか。先に述べたように、小方(1996)によれば、入学の難易度、つまり選抜性が高い大学の卒業生の場合、また卒業後職務経験を積んだ者の場合(応用的教育が志向されることに変わりはないものの)、理論的な教育、論理的・体系的な考え方を求める傾向がみられるという。

選抜性についてこのような結果が示されているのは、おそらく選抜性の高い大学には旧帝国大学や有力私立大学が多く、本来的に研究大学としての性格を強く有しており、学生も「手に職をつける」という実学志向で大学に入学する者が相対的に少ないからだと考えられる。

山口大学教育学部の選抜性は、どのように考えたらよいのだろうか。長らく教員の計画養成学部として存続してきたという意味では職業訓練機関としての性格を色濃く有していることも事実である。また特に近年、教員就職率の低下や学生の学力低下が問題視されてもいる。

今回の調査でも、今後充実させていくべき領域として、就職や職業技術の獲得に直接的に役立つ授業を望む者が少なくなかった。また、教育学部の授業の目的(「専門的な知識・技能を培い、豊かな人間性を育む」)が達成されていなかったと指摘した者のなかには職業上の知識・技能の習得に役立たなかったことを理由として挙げた者もいた。

しかし、職業に役立つことを期待する者よりも、専門性を高めたり深めたりする授業を期待する卒業生の方が多いこと、また目的が達成されなかった理由についても、「自分の学習意欲の欠如」を挙げたいわば自己反省型の回答者が多かった。そして何よりも、64%もの卒業生が「教育学部の目的は達成されていた」と回答している。つまり、本学の卒業生の多くは、単に実践的教育や職業教育のみを求めているわけではないし、教育学部の授業の成果を否定的に評価しているわけでもない。卒業生の要望にも、どのような職業につくとしても「豊かな人間性」が不可欠であり、「優れた人間を集める学部ではなく、優れた人間を育てる学部」であってほしいという声も数多く寄せられた。こうした点を考慮しつつ、理論的教育と応用的ないしは実践的教育のバランスをいかにはかっていくのが今後の重要な課題である。

3 卒業生・修了生による教育評価の成果と課題

授業評価そのものは単発的なもので終わらせるのではなく、学習者の成長・発達段階を十分考慮しながら、長期的・継続的なものにしていくことが前提となる。先行研究ではこうしたことの必要性も指摘している(水谷、1998など)。一方で、評価が改革に結びついていないとか、学内に評価の専門家がない、あるいは他大学との比較ができない、といった指摘もある(米澤、1999)。その意味では、計画→実行→評価→改善といった評価・改善サイクルを確立し、実証的研究成果に基づく生産的な大学院・学部改革案が提示されることが強く望まれている。

今回の卒業生・修了生に対する教育評価の調査は学部機能改革に向けての端緒である。学部教育ならびに研究科教育においても、授業有効度、生活充実度、学部満足度において、全体的には

良い評価が得られたものの、所属する教室あるいは指導する教官によって評価に差があることも明らかになった。

卒業生の自由記述のなかに「学生時代には良き研究者・専門家ではなく、良き教育者と出会いたいし、出会ってほしい」というものがあつた。「研究と教育の結合」という古くからの大学教育の課題は、新たな局面として青年期に入る学生にとっての魅力ある学びと成長の場となる「教育」である。そうした意味では、学生や地域の教育ニーズを踏まえた総合的な見地からの評価調査への発展が本研究科・本学部の重要な課題となる。

〈引用文献〉

- 加野芳正, 浦田広明 1997 チャイルドショックと教員養成学部—脱教職志向学生の増加とその要因, 日本教師教育学会年報, 第6号, 日本教師教育学会
- 水谷惟恭 1998 東京工業大学における在学生及び卒業生による授業評価について, 文部省高等教育局(編) 特集/大学におけるカリキュラム改革等の進捗状況—事例紹介, 大学と学生, No.396, 第一法規出版
- 守 一雄・小林輝行・川島一夫・東原義訓・小松伸一・高橋知音 1998 教育学部卒業生小中学校教員による学部授業の評価(第2報) —現職教員にとって「印象に残る授業」「役に立つ授業」とは何か—, 信州大学教育学部紀要, No.93
- 小方直幸 1996 卒業生からみた大学, IDE, No.379, 民主教育協会
- トロイヤー, M. E. 1976 原一雄, 原喜美ほか「卒業生によるICU在学経験の評価」, 国際キリスト教大学学報I—A教育研究, 19
- 山内 乾史 1995 職務と大学教育 日本労働研究機構(編)大卒者の初期キャリア形成—大卒就職研究会報告—, 調査研究報告書, No.64, 249-263, 日本労働研究機構
- 米澤彰純 1999 大学評価と市場原理, 広島大学教育研究センター研究叢書, 56

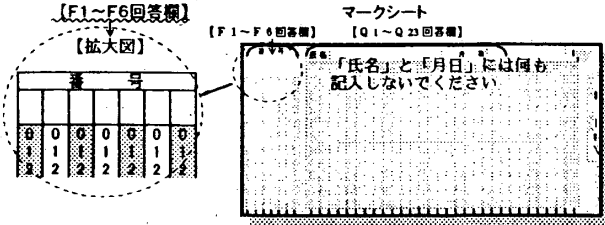
卒業生による授業評価調査票

山口大学教育学部 2002年3月実施

【記入方法】

- ◆回答は同封のマークシートに、HBよりも濃い鉛筆(シャープペン)でマークしてください。ボールペンやサインペンは機械が読み取れないので、必ず鉛筆類でマークしてください。
- ◆無記名でご回答いただきますので、マークシート最上段の「氏名」と「月日」の欄は使用しません。なにも記入しないでください。
- ◆設問のQ.1～Q.23は、マークシート最上段の番号に対応しています。

- F1～F6はマークシート左側の「番号」欄にマークしてください。
- Q1～Q23は最上段が1～30と印刷してある欄にマークしてください。



●【フェイスシート】: 次のF.1～F.6はマークシート左側の「番号」欄にマークしてください。

- F1. あなたの性別は?
1.男 2.女
- F2. 現在のお住まいは山口県内ですか?
1.山口県内 2.山口県外
- F3. あなたが卒業された年は?
1.平成元年以前 2.平成2,3年 3.平成4,5年 4.平成6,7年
5.平成8年 6.平成9年 7.平成10年 8.平成11年 9.平成12年
- F4. 現在のご職業・所属は?
1.小学校教員(本採) 2.中学・高校教員(本採) 3.小学校教員(臨採)
4.中学・高校教員(臨採) 5.民間企業 6.公務員(教員以外) 7.その他
- F5. これまでに臨時採用の教員を経験されたことがありますか? ご経験がある場合はその年数を教えてください。臨時採用のご経験がない場合は0をマークしてください。
0.臨時採用経験なし 1.1年 2.2年 3.3年 4.4年 5.5年 6.6年 7.7年
8.8年 9.9年以上
- F6. あなたが卒業論文を提出された教室(研究室)は次のうちのどの教室ですか?
注:「番号」欄の右側の2列を従ってマークしてください。(例えば国語(01)の場合は1列目の0と2列目の1を、養護(15)の場合は1列目の1と2列目の5をマークしてください)
- 01.国語 02.社会 03.数学 04.理科 05.音楽 06.美術 07.保健
08.保健 09.技術 10.情報 11.家政 12.英語 13.国際理解
14.総合文化(国際文化を含む) 15.養護 16.幼児 17.教育 18.心理

- 設問A: あなたにとって、次における教育学部の授業科目はどの程度有意義だと思えますか。
- | | | | | |
|--------|----------|-----------|----------|---------|
| 非常に有意義 | ある程度は有意義 | あまり有意義でない | 全く有意義でない | 受講しなかった |
|--------|----------|-----------|----------|---------|
- Q1. 所属教室に関連する専門領域の科目
- Q2. 教育学や心理学など教育科学系(教職専門)の科目
- Q3. 国語学、社会科学、数学、物理学、体育実技、演奏、絵画など教科内容系(教科専門)の科目
- Q4. 教科教育法〇〇、△△教育学など教科教育系の科目
- Q5. 初等科〇〇など主に小学校(初等)教育系の内容に関する科目
- Q6. 「人間と科学」や「同和人権教育論」などの総合的な科目
- Q7. 教育実習のうち、附属学校園で行う基本実習
- Q8. 教育実習のうち、委託校で行う委託実習

- 設問B: 教育学部の授業は、あなたにとってどのように貢献するものであったと思えますか? 次における観点からお答えください。
- | | | | |
|---------|---------|-----------|----------|
| 非常にそう思う | かなりそう思う | あまりそう思わない | 全くそう思わない |
|---------|---------|-----------|----------|
- Q9. 幅広い分野の知識・教養を身につけることができた
- Q10. 特定分野の知識・技能を身につけることができた

(※右上段につづく)

- Q11. 教官や学生との交流が充実していた
- Q12. 自分の人生観を形成することができた
- Q13. 将来の進路を選択するのに役立つ

設問C: あなたの所属しておられた教室内の教官や学生との交流は、あなたにとってどの程度有意義だと思えますか。次における活動についてお答えください。

- | | | | | |
|--------|----------|-----------|----------|---------|
| 非常に有意義 | ある程度は有意義 | あまり有意義でない | 全く有意義でない | 経験していない |
|--------|----------|-----------|----------|---------|
- Q14. 日常の学習活動
- Q15. 卒業研究(論文、作品、発表など)の遂行・作成
- Q16. 就職や進路等の選択
- Q17. 教室単位での行事(合宿研修など)への運営・参加

設問D: 今後、教育学部はどのような授業を充実させていきたいと思いますか? 次の「授業領域」と「授業形式」について、それぞれ1つずつ選んでください。

- Q18. 授業領域
- 1.教養を広げたり深めたりする授業
 - 2.専門性を高めたり深めたりする授業
 - 3.人間性を豊かにする授業
 - 4.就職や職業技能の獲得に直接的に役立つ授業
 - 5.特になし
- Q19. 授業形式
- 1.講義形式 2.演習形式 3.実習・実技形式 4.特になし
- Q20. 教育学部の授業科目のうち、もっと履修の割合を増やすほうがよいと思われるのはどのような科目ですか。次の中から1つだけ選んでください。
- 1.所属教室に関連する専門領域の科目
 - 2.教育学や心理学など教育科学系(教職専門)の科目
 - 3.国語学、社会科学、数学、物理学、体育実技、演奏、絵画など教科内容系(教科専門)の科目
 - 4.教科教育法〇〇、△△教育学など教科教育系の科目
 - 5.初等科〇〇など主に小学校(初等)教育の内容に関する科目
 - 6.「人間と科学」「同和人権教育論」などの総合的な科目
 - 7.教育実習や介護体験など、実地体験をする科目

設問E: 成績評価についてお尋ねします。

- Q21. 教育学部の授業全体を振り返ってみて、教官が出した評価結果はあなたが予想していた通りでしたか。次の中から1つだけ選んでください。
- 1.ほとんど予想通りだった
 - 2.ある程度予想通りだった
 - 3.あまり予想通りではなかった
 - 4.ほとんど予想通りではなかった
 - 5.憶えていない

設問F: 教育学部の目標、教育学部に対する期待等についてお尋ねします。

- Q22. 教育学部の授業には「専門的な知識・技能を培い、豊かな人間性を育む」という目的が掲げられています。教育学部の授業全体を振り返ってみて、あなたはこの目的が達成されていたと思えますか。1つだけ選んでください。
- 1.達成されていたと思う
 - 2.ある程度は達成されていたと思う
 - 3.あまり達成されていなかったと思う
 - 4.達成されていなかったと思う
 - 5.わからない
- Q23. 上のQ22で3または4を選んだ方のみお尋ねします。達成されていなかったと考える最大の理由は何か。1つだけ選んでください。
- 1.自分の興味・関心に合っていないから
 - 2.内容が難しすぎたから
 - 3.教員に熱意が感じられなかったから
 - 4.考えさせる授業が少なかったから
 - 5.職業上の知識・技能の習得に役立たなかったから
 - 6.自分の学習意欲が低かったから
 - 7.その他(マックス20文字以内)具体的に記入してください
- Q24. 教育学部に対するご意見やご要望をマークシート裏面に自由に記述してください。

◆ご協力ありがとうございました。
◆回答用のマークシートのみを、同封の返信用封筒で4月8日(月)までに投函してください。

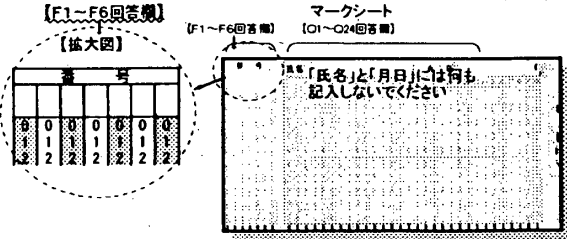
大学院修了生による授業評価調査票

山口大学教育学研究科 2002年4月実施

【記入方法】

- ◆回答は同封のマークシートに、HBより濃い鉛筆(シャープペン)でマークしてください。ボールペンやサインペンは機械が読み取れないので、必ず鉛筆でマークしてください。
- ◆無記入でご回答いただきますので、マークシート最上段の「氏名」・「月日」の欄は使用しません。何れ記入しないでください。
- ◆設問のQ.1～Q.24は、マークシート最上段の番号に対応しています。

- F1～F6はマークシート左側の「番号」欄にマークしてください。
- Q1～Q.24は最上段が1～30と印刷してある欄にマークしてください。



●【フェイスシート】: 次のF1～F6はマークシート左側の「番号」欄にマークしてください。

- F1. あなたの性別は?
1.男 2.女
- F2. 現在のお住まいは山口県内ですか?
1.山口県内 2.山口県外
- F3. あなたが大学院を修了された年は?
1.平成9年 2.平成10年 3.平成11年 4.平成12年 5.平成13年
- F4. 現在のご職業・所属は?
1.小学校教員(本採) 2.中学・高校教員(本採) 3.小学校教員(臨採)
4.中学・高校教員(臨採) 5.民間企業 6.公務員(教員以外) 7.その他
- F5. 大学院を修了されて以後、臨時採用の教員を経験されたことがありますか?ご経験がある場合はその年数を教えてください。
0.臨採教員経験なし 1.1年 2.2年 3.3年 4.4年 5.5年以上
- F6. あなたが所属していた専修は次のうちどれですか?
注:「番号」欄の右端の2列を使ってマークしてください。(例えば学校教育専修(01)の場合は1列目の0と2列目の1を、英語教育専修(11)の場合は1列目の1と2列目の1をマークしてください)
- | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 01.学校教育専修 | 02.国語教育専修 | 03.社会教育専修 | 04.数学教育専修 |
| 05.理科教育専修 | 06.音楽教育専修 | 07.美術教育専修 | 08.保健体育専修 |
| 09.技術教育専修 | 10.家庭教育専修 | 11.英語教育専修 | |

設問A: あなたにとって、次における大学院の授業科目はどの程度有意義だったと思いますか。

	非常に有意義	ある程度は有意義	あまり有意義でない	全く有意義でない	受講しなかった
Q1. 自分の専修分野に直結した専門領域の科目	1	2	3	4	5
Q2. 教育学や心理学など、学校教育に関する科目	1	2	3	4	5
Q3. 国語学、社会科学、数学、物理学、体育学、器楽、絵画など、教科専門に関する科目	1	2	3	4	5
Q4. ○○科教育特論、△△科教育特論演習など、教科教育に関する科目	1	2	3	4	5
Q5. 課題研究	1	2	3	4	5

設問B: 大学院の授業科目は、あなたにとってどのように貢献するものであったと思いますか。次における観点からお答えください。

	非常にそう思う	かなりそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
Q6. 幅広い分野の知識・教養を身につけることができた	1	2	3	4
Q7. 特定分野の知識・技能を身につけることができた	1	2	3	4
Q8. 教官や学生との交流が充実していた	1	2	3	4
Q9. 自分の人生観を形成することができた	1	2	3	4
Q10. 将来の進路を選択するのに役立った	1	2	3	4

設問C: 大学院であなたが受けた授業の成績評価についてお尋ねします。

Q11. 授業全体を振り返って判断した場合、教官が出した成績評価はあなたが予想していた通りでしたか。次の中から1つだけ選んでください。(※右上段につづく)

- 1.ほとんど予想通りだった
- 2.ある程度予想通りだった
- 3.あまり予想通りではなかった
- 4.ほとんど予想通りではなかった
- 5.憶えていない

Q12. 成績評価の方法や判定基準について、あらかじめ教官から提示がありましたか。次の中から1つだけ選んでください。

- 1.明確に示されていた
- 2.ある程度は示されていた
- 3.あまり示されていなかった
- 4.まったく示されていなかった
- 5.憶えていない

設問D: 修士論文(作品、発表を含む)についてお尋ねします。

Q13. 修士論文のために指導教官が行った指導は、どれくらい熱心なものであったと感じますか。次の中から1つだけ選んでください。

- 1.非常に熱心であった
- 2.ある程度は熱心であった
- 3.あまり熱心ではなかった
- 4.まったく熱心ではなかった
- 5.憶えていない

Q14. あなたが完成させた修士論文について、あなたはどの程度満足していますか。次の中から1つだけ選んでください。

- 1.非常に満足している
- 2.ある程度は満足している
- 3.あまり満足していない
- 4.まったく満足していない
- 5.憶えていない

Q15. 大学院で学んだ成果を、在学中を含めこれまでに学会や研究会などの場(修士論文発表会を除く)で発表したことがありますか。次の中から1つだけ選んでください。

- 1.学会誌・専門誌・紀要などに論文を投稿したことがある
- 2.学会で口頭発表を行ったことがある
- 3.(学会以外の)研究会で報告をしたことがある
- 4.上記に該当しないがたちで発表したことがある
- 5.まったく発表したことがない

設問E: あなたが所属していた専修内の教官や院生・学部生との交流は、あなたにとってどの程度有意義だったと思いますか。次における活動についてお答えください。

	非常に有意義	ある程度は有意義	全く有意義でない	経験していない	
Q16. 日常の学習活動	1	2	3	4	5
Q17. 修士論文(作品、発表を含む)の遂行・作成	1	2	3	4	5
Q18. 就職や進路などの選択	1	2	3	4	5
Q19. 専修単位での行事への運営・参加	1	2	3	4	5

設問F: 今後、大学院はどのような授業を充実させていくべきだと思いますか。次の「授業領域」と「授業形式」について、それぞれ1つずつ選んでください。

- Q20.
- 1.自分の専修分野に直結した専門領域の科目
 - 2.教育学や心理学など、学校教育に関する科目
 - 3.国語学、社会科学、数学、物理学、体育学、器楽、絵画など、教科専門に関する科目
 - 4.○○科教育特論、△△科教育特論演習など、教科教育に関する科目
 - 5.課題研究
 - 6.特になし

- Q21. 授業形式
- 1.講義形式 2.演習形式 3.実習・実技形式 4.特になし

設問G: 大学院の目標、大学院に対する期待などについてお尋ねします。

Q22. 大学院は、高度専門職業人の養成を目的の1つに掲げています。大学院の授業全体を振り返ってみて、あなたはこの目的が達成されていたと思いますか。1つだけ選んでください。

- 1.達成されていたと思う
- 2.ある程度は達成されていたと思う
- 3.あまり達成されていなかったと思う
- 4.達成されていなかったと思う
- 5.わからない

Q23. 上のQ22. で3または4を選んだ方のみお尋ねします。達成されていなかったと考える最大の理由は何ですか。1つだけ選んでください。

- 1.自分の興味・関心に合っていないから
- 2.内容が難しすぎたから
- 3.教員が熱心で教じられなかったから
- 4.考えさせる授業が少なかったから
- 5.職業上の知識・技能の習得に役立たなかったから
- 6.自分の学習意欲が低かったから
- 7.その他(マークシート裏面に具体的に記入してください)

Q24. 大学院に対するご意見やご要望をマークシート裏面に自由に記述してください。

- ◆ご協力ありがとうございました。
- ◆マークシートだけを同封の返信用封筒に入れ、4月30日(火)までに投函してください。